

私の趣味（地形散歩）について

私が東京で地形の高低差を意識したのは今から30数年前です。新宿区若松町での研修のため、新潟から出て行った私は曙橋駅から若松町まで歩いたのですが、その時不思議な感覚に包まれたのを覚えています。谷筋みたいな商店街に入り込み、奥まった地点まで歩き、そこから数メートルの崖（階段）を登り研修施設に着いたのです。その後、帰省しない土日などは都内を歩き回ったのですが、坂だらけの土地が多いことや、高低差が余すところなく利用されていることに驚きました。それから10数年経ちNHKのブラタモリや、内田宗治氏の本を読んで、さらに都内の高低差に興味を持ち、暇を見つけては歩き回っていました。



想像するに家康が初めて見た風景は凹凸の多い台地と芦沼の広がる海辺で、およそ都市に向かない土地であったのではないかと思います。(国立自然教育園のような原風景)そして秀吉の命とは言えそこを開発しようとした家康の先見の明に驚かされます。結果的に凹凸のある地形は大名屋敷や庭園に趣を与え(皇居、椿山荘など)、目の前の沼地や海辺は埋め立てて平地をいくらでも広げることができたわけです(羽田空港など)。また台地の湧水は谷を作り多くの階段がある街並みを作っています。しかし最近ではコロナ禍で東京に行けないので国土地理院の高低差地図とグーグルマップを基に都内の高低差を見て回っています。都内の高低差は私に大地と人間のドラマを与えてくれます。

(念仏坂)

